

30数年振りに52歳で、 じいさんバンドを



で無くなった貿易センタービルです。

学生時代にフォークソングクラブで、バンドを。でも、あつという間の四年間。卒業後、地元の市役所に就職、三三年余り。その間、ギターも、バンドをすることもありませんでした。

四〇歳の頃から、退職後の人生、生きがいについて、何をやるうか、真剣に考えていました。四五歳の時、長年親しんできた写真をやろうと決心。中判のカメラ機材を購入し、退職後の人生に備え、準備を。五〇歳に、頓挫。機材を全部、売却。
そんな折り、ひよんなことから、バンドを再開。それが、今、生きがいになっています。

音楽との出会い

現在、五七歳。公務員となり、三



向後 雄一

千葉県八千代市総務企画部
総合企画課長

【こうご ゆういち】1950年東京都生まれ、1974年駒澤大学文学部地理学科卒業、同年八千代市役所に。企画政策課副主幹、総務課副主幹、広報広聴課課長を歴任後、2007年から現職。妻と2人の息子と同居。(長男は結婚し、独立。長男には長女/私にとって、孫)

三年余り。二三歳で大学の同級生と結婚。その年に就職。三人の男の子の父親で、孫一人。勤務先では、課長職にあり、あと三年余りで定年。私の足跡を振り返って見た時、音楽との関わりが、私の生きて来た人生だったのかと感じてます。

音楽を意識したのは、東京オリンピックがあった、中学二年の時。当時の楽しみは、ラジオで一〇時から始まる「S盤アワー」。今、記憶にあるのは、フランスのシルビイー・バルタンの「アイドルを探せ」。初めて耳にするフランス語。舌足らずの歌い方、女性を意識したことを。その他、フランス・ギャルの「夢見るシャンソン人形」。イタリヤのジリオラ・チンクエッティの「夢見る想い」。そして、アメ



1999年8月、憧れのアメリカ。その象徴、ニューヨークの自由の女神を見学した時の写真。右手に見える2つの高いビルは、9.11

リカのカスケーズの「悲しき雨音」、デル・シャノンの「悲しき街角」など、洋楽との出会いが大人の入り口、異次元に入ったような新鮮な印象を受けました。

当時、三波春夫の「東京オリンピック音頭」とか、テレビでは歌謡曲しか、流れていなかったのだ。

音楽喫茶で生の音楽を

高校に入学し、新宿にあった、今でいうライヴハウス、当時の音楽喫茶「ABC B」などに行き、グループサウンズのタイガース、ゴールデンカップスやカーナビーツなどの音楽を、生で聴くように。

そんな時、夜にラジオで聴いていた「バイタリス・フォーク・ビレッジ」の公開録音などを見に行くようになり、「白いブランコ」のピリーバンバン（当時、お兄さんは入っていません。）や「バラが咲いた」のマイク真木などを見、フォークソングという音楽に興味を。ボタンダウンシャツにコットンパンツという爽やかな服装に憧れを持つように。そのスタイルは、俗にアイビーと言われるもので、アメリカの大学生の着こなしです。

フォークソング、アイビーの服、自由な国アメリカ、楽しそうな大学生活

に憧れを持ちました。

でも、僕は小中学校とも、音楽の通信簿はズーっと2。さらに、中学二年の時には、夏休みの補習で、音楽の先生とマンツーマンで歌の練習をするなど、自分は音痴ではと、トラウマに。勉強をしたいという気持ちはなかったのですが、大学生活を送りたいの思いは強くなりました。

フォークソングクラブに

駒澤大学を受験、合格。入学と同時に、軽音楽部フォークソング研究会に入部。クラブに入ると、始めにオーディション。希望者は、全員入部できるのですが、一人ずつ、ステージに上がり、ギターを引きながら、曲を歌うのです。これにより、ギターの班や歌のパートが決まり、僕は、ギターはB班、歌のパートは、ローパートに。一緒に入部した一年生は、一〇〇人余りの大所帯。大学に短期学部があったので、半分は女の子。僕も含め、同級生同士で結婚したのは三組。結果的には、合コンクラブみたいですね。夏の合宿を過ぎた頃は、一年生は半分に。

音楽のクラブなのに、体質は体育系そのもの。先輩にあつたら、「こんにちは」、帰るときは「失礼します」と

挨拶は厳しく指導を。練習は、週三回。一七時から大学の教場に集まり、一九時まで二時間。練習が終わると、渋谷の街で、同級生と喫茶店で、ダラダラとたべり。高校生の時は、喫茶店へ入ると停学に。大学生になったことで大人への第一歩を実感。地方から来た人はアパートや下宿。僕は自宅通学でしたが、週三回程度は同級生や先輩の所に泊り、取り留めのない話で、夜遅くまで。クラブの定例行事は、年二回、夏と春に一週間の合宿と、新入生歓迎コンパ、卒業生の追い出しコンパの二回の宴会。その他、年一回のコンサート。学園祭の模擬店で、喫茶コーナーを開設し、ステージでバンドの演奏を。

当時の先輩は、コピーバンド、今でいうカバー、アメリカのキングストントリオ（通称キントン）、ブラザースフォー（通称ブラフォー）やピーター・ポール＆マリー（通称PPM）スタイルのバンドを。

バンドを結成

バンドは、好きなもの同士で結成。僕は、さて、どんなバンドをと。そんな時、埼玉県大宮市から来ていた松本修から、「サイモン＆ガーファンクルをやらぬか」との話があり、バンドを



結成。大学の隣がオリンピック記念公園、その中に、庇のある場所、通称「ニユーポート」で練習。生ギター二本で、僕は、お茶の水のカワセ楽器の注文生産のSタイプのギター。松本は、ギブソンのB25のギターを使っていました。

話が変わりますが、僕の奥さんは、大学の同級生。広島市出身で、高校時代のギターの先生は、吉田拓郎さん。「結婚しようよ」や「襟裳岬」などがヒットしましたが、当時はまだ、無名のプロのシンガーソングライター。ある時、松本と僕の奥さんと三人で、「今日は帰りたくないの、拓郎さんのアパートに行こうか」と、当時住んでい

た高円寺に。約束をしていた訳ではないので、アパートの前の公園で帰りを待ち、泊めてもらいました。一言二言話をしたのですが、豪快な話し方はするのですが、シャイな人という印象でした。

関フォー連の委員長に

三年生になった時、クラブの中で涉外（いまでいうマネージャー）に。業務は、対外的なことの打ち合わせ。その多くは、関東フォーックソング連盟の委員として、会議に出席することでした。当時の先輩から、話があり、委員長に立候補し、当選。当時、この連盟は、早稲田・法政・明治・慶応・中央・独協・駒沢・神奈川・フェリス・成城の一〇大学のフォーックソングクラブが加盟し、構成員一〇〇〇人余りの団体。主な行事は、例年五月三日の日比谷野外音楽堂の「フーテナニー」や構成団体によるバンドコンサート。

このフーテナニーをラジオで紹介してもらったために、ニッポン放送で、放送作家から取材を。担当が、後に、吉田拓郎さん作曲の「襟裳岬」の作詞家「岡本おさみ」さんでした。

当時、音楽評論家である「東理夫（ひがしみちお）」さんと知り合いました。



昨年10月、大学の先輩が開催したガーデンパーティーで。左から、松本修、加藤正視、筆者。昔は、みんな長髪で、黒髪だったのに

東さんは、日本人として二番目に、ナッシュビルにあるカントリー音楽の殿堂、グラランド・オール・オープリーに出演した方で、現在も、音楽評論家、翻訳家や随筆家として日本経済新聞にエッセーを連載するなど活躍中。当時、某ラジオ局のディレクターをしていた小山さんを紹介してもらいました。小山さんは、学生時代、フロッギーズというバンドのリーダーで、ヤマハ主催の第一回ライト・ミュージック・コンテストの優勝バンド。今は再結成し、新宿にあるライブハウス「バック・イン・タウン」に出演。ステージを見、頑張っているだなどという思いと、懐かしさを。

ある時、東さんから、「卒業したら、就職は」と。「考えていません」と話すと、「某テレビ局の仕事は」と。「考えさせてください」と返事をし、一週間後に、丁重にお断りさせていただきました。若気の至り、生意気でした、僕の学生時代は。

そんな大学生活というより、クラブ生活は、青春のひと時の良い思い出で、またたく間の四年間でした。

地元の市役所に就職

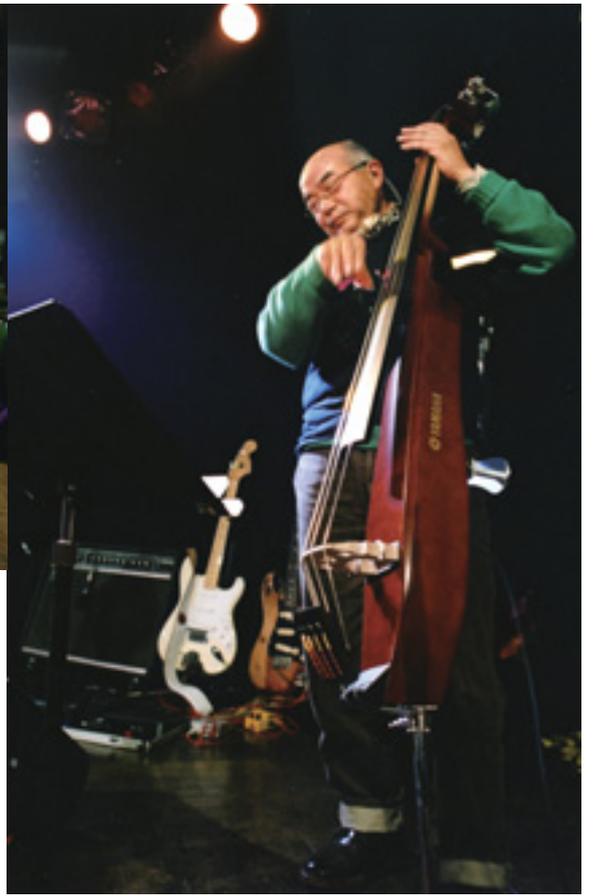
昭和四九年（一九七四）に市役所に。同年に結婚。給料を一人で使ったことがありません。だから、給料を一人で

使ってみたいという願望を持っています。

就職してから、バンドも、ギターを弾くことも無縁に。でも、音楽が好きで、当時のレコードは、常に聴いていました。好きな傾向は、アメリカの西海岸ウエストコースト系の音楽。ジャクソン・ブラウン、イーグルスやニール・ヤングなど。レコードの枚数も五〇〇枚程度あったと思います。音源がCDに変わったとき、持っていたレコードを、CDに買い換え、レコードは、ゴミとして廃棄。今、思うともつたないことを。後悔、先に立たずです。CDは、現在、レコードと同様五〇〇枚余り、持っています。

音楽以外の趣味は、学生時代から始めたスキー。卒業後も同級生と三〇年以上。先月も、北海道の札幌国際スキー場に。このほか、仕事柄、写真撮影も三〇年近く。美術館へいくこと





上の写真は、OBOG会の行事で、目黒ブルースアレイジャパンでの、大学の先輩バンド、ドゥーリーズ。卒業後、初めての再結成のステージです。左から、吉田豪さん、河原積さん、山下孝さん。右の写真は、同じく先輩の小俣幸一さん。小俣さんは、ベースの他、登山も。何年前には、7,000メートルに近い山、南米の最高峰アコンカグアに登頂しました

も好きなことのひとつ。一年前から絵を描くようになり、今まで三〇〇枚程度、描きました。

じいさんバンドを結成

六年前に、クラブのOBでバンド・コンサートをと話が持ち上がり、時期は二〇〇二年六月、会場は東京の調布市のグリーンホールでと。前年の一〇月。元メンバーの松本から「バンドやるるか」とあり、即、「やろう」と返事。同級生の加藤正視も誘おうと連絡。「いいよ」と快諾。三人のメンバーが決まり、バンド名も、トム&ジェリーズに。曲も、学生時代に演っていたサイモン&ガーファングルの曲を、僕の家で、初めての練習。

当日、みんなが持ってきたギターは、学生時代に使っていた生ギター。はじめは声はでない、ギターを押さえると指が痛い、コードを押さえても音が出ないの三重苦。そんな状態で、二回程、練習を。

その頃、胃カメラの検診結果で病院に。先生に「初期のガンです。いつ、入院できますか。」とあっさりと言われ、僕の頭の中は真っ白に。それから、三か月程、仕事を休み、胃を三分の二摘出。この間、バンド練習はお休み。五月中旬に退院し、一回の練習で、

ひと月後の本番のコンサートに出演。僕は、腹筋を切った手術後、他のメンバーも練習をしてないため、歌詞は忘れるやら、リズムは狂うやらで惨憺たる、再結成の初めてのステージでした。

その後、月一回定期的に、我が家で練習を。メンバーは二時間近くかけ、朝八時に集合。朝食を食べ、雑談をし、練習は九時から一二時、昼食をはさみ、一時から三時まで。丸五年、練習していませんが、中々、うまくなりません。今、練習している曲は、僕たちの中学・高校生当時の六〇年代の曲。カスケーズの「悲しき雨音」。デル・シヤノンの「悲しき街角」。サークルの「レッド・ラバー・ボール」。ビートルズの「P. S. アイ・ラブ・ユー」です。



楽器は、僕がエレ・アコギター、加藤がエレキギター、松本がベースという編成で、出演する時は、後輩にドラムを頼み、昔でいう、バースのようなフォーク・ロックの編成のバンド。五〇代になると、人を指導することはあっても、直接、教えてもらうことは少ないものです。でも、バンドでは、こういう風にギターを弾いてとか、その音はこの音だから、間違えないでとか、教え合いながら、練習を。練習も楽しいですが、月一回は定期的な同級生と世間話をし、普段も、毎日、三〇分は歌やギターを練習をしています。バンドを組んで、生活のリズムに、張りができました。

クラブのOB会が設立

その後、駒沢大学軽音楽部フォークソング研究会OB・OG会が、正式に発足。四二歳から六〇歳までの年齢で、総勢三五〇人余りが参加。五〇歳を過ぎた今でも、先輩に会えば、「こんにちは」。帰るときは、「失礼します」。先輩を呼ぶ時はさん付け。同級生や後輩は呼び捨て。女性など姓が変わっても、旧姓で呼びます。相も変わらず、学生時代当時の一〇代後半から二〇代前半のクラブの生活をしています。

三年前には、先輩・同級生・後輩の一〇人で、アメリカのロスアンジェルス・サンフランシスコへ旅行に。また、東京のスタジオや僕の家で練習した時など、終わると一〇数人で、宴会です。気分はまるで学生です。皆、子育ても終わった、そんな時期に始まり、再開の時の良い時期だったのかも知れません。

パーティーを開催

調布のコンサートの後、元プロで、後輩の渡辺敏之と、折角、バンドを結成したんだから、出番をつくらうと相談を。年一回、飲んで食べて、バンドが出演できて、会費は八千円です。そ



の年の一二月、銀座のライブハウス「タクト」を貸し切り、パーティー・バンドコンサートを開催。次の年は、新宿の「ミノートル2」。バンド数も増え、観客も多くなってきたので、次はどこかで悩んでいる時、同級生で現役プロの上田司が、「うちの店で、やらない？」と。店はワイルドワズズのリーダー加瀬邦彦さんが経営する「銀座ケネディーハウス」。昨年には四回目を。一回目は八バンドの参加だったが、昨年は一六バンドの参加に。参加者も年々増え、一〇〇人近くに。

また、昨年一〇月に、先輩の自宅の庭園で、ガーデンパーティーを開催。今年は五回目のパーティーを、ケネディーハウスで開催したいと、計画しています。また、六〇歳になったら、幾つかのバンドと一緒に、「還暦パーティー」でもと、相談しています。

四〇歳の頃、六〇歳からの人生、生きがいについて、悩んでいましたが、学生時代の延長から、思わぬ選択肢でバンド活動が、生きがいになりそうです。いつまでやれるかわかりませんが、もう、学生時代の四年間より長い期間、バンドを組んでいます。また、クラブのOB会で、二度目の学生生活・クラブ生活、再び青春を、今、実感しています。

それこそ、生涯学習ですね。